

本人の及び家族の臓器提供の意思決定*

大田健人^a

要約

本研究は、本人及び死亡した家族の臓器提供の意思決定にどのような影響があるか検証を行うため、オンラインでのアンケート調査を実施した。アンケート調査では、「父」「母」「子供」「配偶者」が心停止で亡くなった場合を想定し、それぞれが生前の臓器提供の意思表示が不明な場合に、家族の臓器提供に承諾するかという質問を行った。また、自分自身の臓器提供に賛成するか否かの質問を行った。その結果、死亡した家族の臓器提供の意思が不明な場合の臓器提供承諾率は約 28%～34%、自身の臓器提供に関する承諾率は約 50%であることが確認された。この結果は、家族の体を臓器提供に出すことは、自身の体を臓器提供するより抵抗を抱きやすいこと示唆している。また、家族の臓器提供を承諾する際には、自分の臓器提供の意思決定と異なり、不平等回避性を持つ人ほど家族の臓器提供を承諾しない傾向があることも確認された。

JEL 分類番号： D91, I12

キーワード：臓器提供, 利他性, 互惠性, 不平等回避性

* 本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない

^a 近畿大学大学院経済学研究科修士課程 2433110001n@kindai.ac.jp

1. はじめに

我が国の「臓器の移植に関する法律」では、本人の臓器提供の行う意思が不明な場合、家族の承諾があれば臓器提供を行うことができ、本人の臓器提供の意思が明確であっても、家族が臓器提供を行うことに反対すれば、臓器提供を行うことが出来ないと定められている。

内閣府世論調査(2017)によると、自分が脳死及び心停止と判断された場合、臓器提供をしたいと思うか聞いたところ、「提供したい」が 41.9%、「どちらともいえない」が 33.1%、「提供したくない」が 21.6%であった。他方、家族の誰かが心停止及び脳死と判断された場合に家族が生前意思表示をしていなかった場合において、臓器提供を尊重するか質問したところ、「承諾する」が 38.7%、「承諾しない」が 49.1%であった。自分が脳死及び心停止と判断された場合に、臓器提供を希望する割合と、家族が脳死及び心停止と判断された場合、家族の臓器提供を承諾する割合には大きく乖離がある。こうした状況を鑑みれば、家族の臓器提供の意思決定及び自分の臓器提供の意思決定がどのような要因に影響を受けるかを分析することは、重要と考得られる。

そこで本研究は、オンライン上でアンケートを実施し、家族の臓器提供の賛否状況及び自身における臓器提供の意思表示割合はどのようなになっているか、また家族の臓器提供の承諾及び自身における臓器提供の意思表示はどのような要因に影響を受けるかについて検証を行う。

2. アンケート調査

データを収集するにあたって、クラウドワークスを利用したオンライン上でのアンケート調査を実施した。2025 年 2 月 3 日から 2025 年 2 月 7 日、2025 年 2 月 19 日から 2025 年 2 月 24 日までの回答期間にて、1100 件の回答を得た。回答者の属性は表 1 の通りである。

表 1：回答者の属性

	属性	回答数	割合
性別	女性	494	55.8%
	男性	378	42.7%
	答えたくない	13	1.4%
年代	20 代	130	14.6%
	30 代	330	37.2%
	40 代	261	29.4%
	50 代	130	14.7%
	60 代	28	3.1%
	70 代	4	0.4%
	80 代	2	0.2%

アンケートでは、自分の家族の死後、その家族の臓器を提供することに承諾するか、反対するかについての質問を行った。亡くなられたと想定する家族は、「配偶者」、「父」、「母」、「子供」の4つに設定をし、それぞれが生前に臓器提供の意思表示を行っていないとする。また、自身が亡くなった際の臓器提供をするか否かについての質問を行った。

さらに、回答者には基本属性（年齢、性別、学歴）の設問にも回答してもらった。また本研究では、利他性、規範意識、正の互惠性、負の互惠性、不平等回避性といった行動経済学的指標が家族の臓器提供の賛否及び本人の臓器提供の意思決定にどのような影響を与えるかについて検討する。アンケートで使用した行動経済学的指標のいくつかは、(大竹他 2020)で使用されたものを用いた。

3. 分析結果

表2は、「配偶者」、「父」、「母」、「子供」が心停止で亡くなった際、臓器提供に対する賛否の人数を示している。家族の臓器提供の意思が不明な場合、残された遺族が臓器提供に賛成するのは30%前後である。また、表3は「自身」が心停止で亡くなった際、臓器提供に対する賛否の人数を示している。本人の死後の臓器提供に賛成する人は約50%である。

表2 死亡した家族の臓器提供の意思が不明な場合の家族の臓器提供に対する賛否の人数

	臓器提供意思表不明	
人数	賛成	反対
配偶者	177 人 (32.8%)	362 人 (67.2%)
父親	262 人 (34.6%)	494 人 (65.3%)
母親	260 人 (31.2%)	572 人 (68.8%)
子供	142 人 (28.6%)	354 人 (71.4%)

表3 自身が臓器提供を行うことに対する賛否の人数

人数	賛成	反対
合計	444 人 (50.16%)	441 (49.83%)

家族の臓器提供の承諾ダミー (0=反対, 1=承諾)、本人の臓器提供意思表示ダミー (0=反対, 1=承諾) を従属変数に、「年齢」、「女性ダミー (0=男性, 1=女性)」、「学歴」、「不平等性回避ダミー (お金の配分をする際に自分よりも他人が多く配分されることを好まない人: 1 それ以外: 0)」、「同調性 (周りと同じようなことをすると安心する: 1=あてはまる, …5=全くあてはまらない)」、「利他性 (他の人のためになることをすると自分も嬉しい:

1=ぴったりあてはまる, …5=全くあてはまらない)」、「規範意識 (約束したことは守る:1=ぴったりあてはまる, …5=全くあてはまらない)」、「正の互惠性 (以前親切にしてくれた人には手間を惜しまず親切にする:1=ぴったりあてはまる, …5=全くあてはまらない)」、「負の互惠性 (ひどく不当な扱いを受けたらその相手に私もやり返す:1=ぴったりあてはまる, …5=全くあてはまらない)」を独立変数としてプロピット分析を行った¹。

表3 推定結果 死亡した家族の臓器提供を行う意思表示が不明な場合

説明変数	配偶者	父親	母親	子供
年齢	.0005429 (.0593682)	-.0608223 (.049652)	-.0958706** (.047369)	-.0475629 (.0602969)
女性ダミー	.0179128 (.1247615)	.0967924 (.1017348)	.0175012 (.0976414)	-.1232904 (.1228526)
年収	-.0337923 (.0614317)	.009241 (.0498671)	-.0041227 (.0482526)	-.088432 (.064855)
同調性	-.0205946 (.0657111)	.0545527 (.0540851)	.0158642 (.0512587)	.1046999 (.0683801)
規範意識	.2041839** (.1054866)	.0822501 (.081524)	.0986636 (.0774091)	-.0206129 (.1170739)
正の互惠性	-.1906662** (.112334)	-.0999194 (.0893384)	-.0616383 (.0855495)	.0004027 (.117482)
負の互惠性	.0873773** (.0529827)	.0122499 (.0434606)	.0224165 (.0420441)	-.0706721 (.0992295)
利他性	-.1147034 (.0903965)	-.10434 (.0721957)	-.1250145** (.0690168)	-.2164509 *** (.0992295)
不平等回避	-.7004617*** (.1065074)	-.6623499*** (.2653191)	-.4793187 *** (.2422734)	-.880681*** (.2922277)
N	528	746	822	492
Pseudo. R2	0.0249	0.0151	0.0151	0.0334

:.10%水準で統計的有意, *:5%水準で統計的有意. 括弧内は標準誤差

¹ 配偶者, 父親, 母親, 子供がいないという回答を除外したため, 各回帰分析の観測数が異なる。

表 4 自分自身が臓器提供を行う場合

説明変数	本人
年齢	-.0290107 (.0426664)
女性ダミー	-.1121223 (.0912243)
年収	-.0126782 (.0452277)
同調性	.0004359 (.0490161)
規範意識	.105378 (.0727746)
正の互惠性	-.1429445** (.0795687)
負の互惠性	-.0339437 (.039678)
利他性	-.2926027*** (.0651079)
不平等回避	-.1488895 (.2391415)
N	872
Pseudo. R ²	0.0296

:10%水準で統計的有意, *:5%水準で統計的有意. 括弧内は標準誤差

表 3 は死亡した家族が生前において臓器提供の意思が不明な場合、表 4 は自分自身の臓器提供の意思決定の推定結果である。表 3 の父親と配偶者を除いた項目で、利他性の回帰係数は有意に負であることが確認できる。これは、家族、本人に関わらず利他性が高い人ほど、臓器提供そのものに賛成する傾向が高いことを示している。

また、表 4 において、不平等回避は有意ではないが、表 3 においては全てにおいて負で有意である。このことは、家族の臓器提供を承諾するか否かの意思決定には、自己の臓器提供を行うか否かの意志決定とは異なり、不平等回避が働くことを示している。加えて、表 3 における母親と子供の推定結果においては、利他性が不平等回避よりも回帰係数の絶対値が大きいことが確認できる。このことから、利他性よりも不平等回避が、家族の臓器提供の

承諾の意志決定に与える影響が大きいことが分かる。

4. 結論

本研究では、臓器提供に関するアンケートを実施し、死亡した家族の臓器提供の賛否の状況および臓器提供に影響を与える要因について検証した。その結果、死亡した家族の臓器提供の意思が不明な場合、臓器提供に承諾する家族は約 28%～34%である一方、自分自身が臓器提供されることに関して、半数が賛成することが確認された。このことから、家族の体を臓器提供に出すことは、自分の体を臓器提供することよりも、心理的抵抗を抱きやすいといえるだろう。

また、家族の臓器提供の賛否及び本人の臓器提供に影響を与える要因としては、本人及び家族に関わらず、利他性が高い人ほど臓器提供に賛成する傾向があることが確認できた。加えて、家族の意思表示が不明な場合、家族の臓器提供を承諾する意思決定には、不平等回避を持つ人ほど臓器提供を承諾しない傾向も確認された。

引用文献

内閣府, 2017. 移植医療に関する世論調査.

<https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-ishoku/>

大竹文雄, 加藤大貴, 重岡伶奈, 吉内浩, 樋田紫子, 黒澤彩子, 福田隆浩, 2020. 骨髄バンク登録者・幹細胞提供者の行動経済学的特性. 行動経済学. 第 13 巻. 32-52.